

卒業を迎える子どもたちが 伝統の和紙作りに挑戦

卒業証書のでき上がりが楽しみです。
もらったら絶対おうちに飾ります!



昨年12月、田代小学校、高峰小学校、半原小学校の6年生たちが愛川繊維会館(レインボープラザ)を訪れ、自分たちの卒業証書になる「紙すき和紙」作りに挑戦。同館スタッフのサポートを受けながら木枠にすだれを乗せた器具を溶液の中に入れ、持ち上げて繊維が均等になるよう丁寧に揺すって紙をすきました。完成した和紙は乾燥後、卒業式で卒業証書として授与されます。

半原小学校ではコウゾの植栽から一連の和紙作りの工程を体験

今回使った和紙の原料のコウゾは、半原小学校の児童たちが2年生の時に校内に苗を植えたものです。5年生だった昨年3月には枝の伐採や蒸したコウゾの皮をはぎ取るなど、紙すきを含めて手すき和紙作りの一連の工程を体験しました。

和紙の卒業証書が できるまで

卒業証書の完成!



高峰小

紙を
すく



田代小

半原小

専用の木枠でスタッフと一緒に紙をすく(令和7年12月)

繊維を
叩く



専用の機械でコウゾの繊維を叩いてほぐす

愛川でも海底紙を知らない人は
多いので、よりたくさんの人に知って
ほしいです! 同館スタッフの皆さん

水に
さらす



煮たコウゾを水にさらして不純物を取り除く



紙すきは手が冷たかったけど、すごく楽しかったです。
自分で作った和紙の卒業証書もらえるのは、とても貴重なことだと思うので、小学校の思い出として大切にします。

高峰小学校6年の萩原優翔さん



この経験は、一生の思い出に

(一財)繊維産業会 篠崎俊二理事長

紙をすくだけでなく、より多くの工程を経験してもらい、町の伝統技能を知ってもらえたいと思います。手すき和紙で卒業証書を作った経験はきっといつまでも思い出に残ると思います。

コウゾの苗を手に植栽の説明をする篠崎理事長



苗を
植える

半原小

学校敷地内にコウゾを植栽
(令和3年4月)

コウゾを
育てる



コウゾの育成・管理(令和4年9月)

枝を
切る



半原小

育ったコウゾの枝を伐採
(令和7年3月)

蒸す



伐採したコウゾの枝を釜で蒸す

皮を
煮る



コウゾの皮を釜で煮る

皮を
はぐ



半原小

蒸し上がったコウゾの枝の皮を手ではぐ
(令和7年3月)

2年生のときにコウゾを自分で植えているので、想いがこもった卒業証書になりそうです。
卒業式でもらえるのが楽しみです!

半原小学校6年の上島旭人さん

海底紙ことは初めて知ったので、自分の住む町にこのような伝統産業があったなんてびっくりです。
卒業証書を手作りする中で、もう卒業かと思って、少し寂しくなりました。

田代小学校6年の高橋輝さん



手すき和紙で紡ぐ

愛川のこころ

愛川町がかつて和紙の産地だったことにちなみ、田代小学校、半原小学校、高峰小学校では、(一財)繊維産業会(篠崎俊二理事長)の協力のもと、児童たちが自ら手すきした和紙を卒業証書に使う取り組みを行っています。

☎ 教育総務課 庶務施設班 ☎(内線)3613

伝統の和紙作りを通じて郷土愛を育む子どもたちの卒業証書作りをレポートします。

郷土の誇りをその手に 教育長インタビュー

「卒業証書を手作りすることで、子どもたちに地元の伝統産業を知ってもらい、大きく成長するきっかけにしてほしい」そう穏やかに語るのは、佐藤照明教育長。きっかけは平成29年、(一財)繊維産業会の篠崎理事長から寄せられた一つの提案でした。

「理事長から、『先人の知恵を理解し、郷土愛を持ってもらうために、子どもたちが自分の手で卒業証書を作ってみたいかどうか』とご提案をいただいたんです。かつて和紙作りが盛んだった角田の海底(おぞこう)地区。その歴史を次世代へ繋ぎたいという熱い思いでした」

舞台となったのは、同地区を学区に持つ田代小学校。「当時の校長先生がこの提案に賛同され、同校で紙すき和紙の手作り卒業証書の取り組みがスタートしました。一生の宝物になる卒業証書ですから、同会の皆さんと学校現場が二人三脚でこだわりを持って作りました。

卒業証書の大きさを保ちながら一定の厚さの紙が作れるか、校章の透かしを入れることができるか、卒業生の名前を墨で書くことができるかなど、同会の皆さんと何度もやり取りし、試作を重ねました。原料の割合などが決まり、平成29年度の田代小学校の卒業生が町で初めて『手すき和紙の卒業証書』を手に入れました。この取り組みは、徐々に町内へ広がっていきます。「翌年度には半原小学校、さらに高峰小学校が令和元年度にと、和紙作りの輪が

広がっていきました。自分たちが暮らす町の伝統に触れ、自分の手で作り上げた証書を手にする。この手作り卒業証書を通して、郷土愛を自然に深めることができるすてきな取り組みだと思っています」最後に、佐藤教育長はこう締めくくりました。「世界に一枚だけの証書を開くとき、子どもたちは愛川町の豊かな自然と、温かい大人たちの姿を思い出すはずです。この伝統を、これからも大切に守っていきたくです」



半原小学校で和紙の原料となるコウゾを植栽する佐藤教育長(令和3年4月)



和紙の卒業証書の見本を興味深く眺める半原小学校の児童



コウゾを中津川の水にさらし、不純物を取り除く作業(昭和40年前後)

しかし、建具に占める障子の割合が少なくなってきた昭和40年〜50年ごろになると製紙業は活気を失うこととなりました。技術を保存する会などでもできましたが高齢化の影響もあり活動を続けられなくなりました。現在は(一財)繊維産業会が技術を受け継ぎ、愛川繊維会館で体験教室などを開催しています。

この当時作られていた和紙は奉書紙と呼ばれる最高級の公用紙で、後には京都の嵯峨御所(大覚寺)にも納められていました。大正初期から昭和の初めにかけて和紙作りは最も栄え、はがき、障子紙、紙帳、養蚕に使用する蚕卵紙、傘紙などがすかれました。

最高級の公用紙
おぞこうがみ
「海底紙」

愛川町では、江戸時代後期に、角田海底地区において、中津川の良質な水を使って紙すきが始まり、「海底紙」と呼ばれる独特の板目を持つ風雅な手すき和紙の産地となりました。